

那須烏山市 中山石調査ノート

坂本 明（宇都宮市文化財ボランティア協議会）

1. はじめに

大谷石が日本遺産に指定され全国的にも注目されているが、栃木県内には規模も小さく歴史に埋もれてしまった石材産地がたくさん存在する。ある意味、大谷石というブランドに圧倒され産地であることも忘れられ、安易に大谷石とされているものも多々ある。徳次郎石研究会では、それらをふまえ、調査研究のテーマの一つとして、栃木県内の石材産地と建造物等の調査をすることにし、手始めとして那須烏山市の調査を始めた。

2. 顔合わせ

那須烏山市での最初の調査は、那須烏山市文化財審議員の吉成登氏のお骨折りで実現の運びとなった。2021年(令和3)6月15日、那須烏山市南那須庁舎にて、那須烏山市担当職員を交えて会議が行われた。会議内容は、那須烏山市内の石材産地の確認と地図に落とし込む作業を行った。

また今後お互いに、調査情報を共有することとし、友好的に会議を終えた。



会議の様子

3. 現地調査

会議の中で酒井豊三郎氏より、那須烏山市中山地区の中山石について採掘場2カ所が確実に存在するとの話が出た。そこで、会議終了後、急遽現地調査をすることになった。(3ページ地図参照)

中山地区は那須烏山市中心部から北に位置し那珂川の右岸から西に入った喜連川丘陵の末端部にある。蛇足ではあるが、在来種の中山カボチャの産地として有名である。

酒井氏の車の先導で現地に向かい、最初に訪れたのは星宮神社裏手の中山石採掘場跡である。星宮神社はもともと背後の丘陵上にあったが、参拝が大変であることから採掘場跡へ移転したものである。また、星宮神社北西部の丘陵には横穴墓3基が開口しており、宇都宮市の長岡地区にある百穴横穴墓群と規模は違うが7世紀前半に造られてことが歴史的に共通している。

2ヶ所目の採掘場跡は星宮神社を道なりに西北に進んだ先、那須烏山市中山717-1の松山工業（給水装置公認工事店）の敷地である。当主の大貫氏（77歳）は酒井氏と面識があり、気さくにいろいろと話してくれた。

以下、内容を箇条書きで記す。

- ・2代目より採掘がおこなわれた。
初代は江戸、宝暦のころ。(大貫氏は6代目)
- ・初代は石塔が専門、文字を彫っていた。(中山石の採掘ではない一般的な石工だったようだ)
- ・小学生のころ落盤事故があった。山止めしていたため怪我人は出なかった。



星の宮神社裏採石場壁面の符丁



松山工業採掘場跡の垣根掘りの痕跡

- ・北側のプレハブ小屋付近でも採掘していたところで落盤事故。(採掘場は大貫さんの所で2か所、星の宮神社の所を入れると3か所)
- ・烏山高校の元校長で地元出身の大山氏も一時期採掘をしていた。
- ・最盛期には、約30名が働いていた。(全員地元)
- ・煙草の乾燥小屋の基礎石や、竈(かまど)として利用。……二連でかなり重かったにもかかわらず、豎坑の階段を担いで登った。
- ・採掘場の入口の部分の石質は白いが、豎坑の深い部分の石質は緑がかった。
- ・一時期、象牙や貝の化石などが出た。象牙には毛もあったというが現物は無い。竈などの現物もない。
- ・立坑に水が溜まっておりそこで泳いだり、水がとても冷たかった。
- ・昭和35年頃に採掘終了。大谷石が普及して、浸食作用に弱いためもあり生き残れず。
- ・石を櫓で運んだと記憶している。
- ・薬師堂…キウショウ寺 明治時代に廃寺。中山石で墓石を造った。
- ・オオノノブrow氏→寺の隣に住む…何か情報が得られるかもしれない。

4. 大山賢一氏の話

6月15日にご一緒した那須烏山市社会教育指導員の柏村勇二氏の骨折りで、大貫氏の話にあった県立烏山高校の元校長、大山賢一氏にお会いすることができた。6月30日、柏村氏と待ち合わせ、大山氏の自宅に伺い約2時間話を聞く。

大山氏は1936年(昭和11)2月22日に東京で生まれたが、養父が戦死したため母の故郷である中山地区に引っ越してきたそうである。

1950年(昭和25)、中学校卒業後、進路を決めるにあたり母に学費の負担をかけぬよう、働きながら烏山女子高にあった定時制に進もうとしていた。そのようななか仕事を探していたところ、偶然、東京江東区から来ていた中山石で倉庫建築を請け負っている田谷野氏と知り合い、彼の元で働くことになったそうだ。田谷野氏は大貫家の採掘場の権利を買い採掘していたようで、黒須タケミさんという石切りの親方が現場を切盛りしていた。



大山 賢一 氏

当初は常備で1日50円の日当で働き、烏山の町への買い物などの雑用をしていたが、そんな思い出の中で残っていることは、自転車で大田原市佐良土の光丸山法輪寺のそばにあった鍛冶屋に行ったことだ。ツルハシの両端に鋼を付けてもらうため、柄を外した何本ものツルハシを麻袋に詰め、道路は当時舗装などされておらず往復はたいへんだったが、作業が終了するまでの時間は自由にできたので楽しかったそうだ。その後、真面目さが認められ石切りの作業もするようになり、常備からに請負なり、一日平均200円の収入になった。その結果、学費も貯まり、翌年高校入学試験を受けなおし、県立烏山高校に入学したそうだ。田谷野氏のもとで働いたのは定時制に通っていた1年間と、全日制に入りなおした年の夏休みの期間中の計、14ヶ月ほどだった。

石切りは、黒須タケミ親方、大野タイジさん、そして中学校の同級生の黒須貞三君(江東区の現場で転落死)と大山氏の4人で作業、忙しいときには小砂石の梶原工業の石工が何度か手伝いに来ていたそうである。なお、当時近隣では小砂石の他、茂木の千本でも採掘が行われていたという。一日の最初の作業はフィゴ(松炭を細かく切って使用)で石鑿の刃やツルハシの先を整える(角を立てる)作業である。掘る溝幅が広くなると規定より石幅が細く石屑も多くなり無駄になってしまうので、ツルハシの刃先を整えるのが一番大切な作業なのだという。炎が黄色くなるまでフィゴを動かし続ける作業は大変であった。作業石切り作業は各自、まず掘る面を掃除し、墨壺を使い墨出しすることから始まる。墨は朱色。切り出す石の大きさは五十(5寸・15cm×10寸・30cm×3尺・90cm)や六十(6寸×10寸×3尺)が主で、墨出しをした線に沿ってツルハシによる溝切をする。終わると1本(長さ3尺・約90cm)につき7本~8本の親指ほどの太さの釘(矢:くさび)を均等のペースで少しずつ底の部分に打ち、剥がすように石を起こした。この剥がした面に魚や貝の化石がたまに出たそうだ。そして、自分の持ち分の区画を起こしたら石鑿で石の大きさを整える。六十の注文が多く、江東区の倉庫用材として、尺角(10寸×10寸×3尺)も切り出した。ねじれたり、寸法が足りないと規格外になるので、石の仕上げは曲尺を使い寸法通りに行くなど細心の注意を払ったという。最後に起こした石の面を平らになるように、表面にツルハシでツルメを施して一日の作業が終わったそうだ。

石切りの賃金は歩合と言っても作業が全くできない日もあった。例えばカチンと音がしてツルハシの刃が跳ね

返されてしまう通称「ガラス玉」という非常に硬い石に打ち当たった場合である。全員作業を中断して、「ガラス玉」を取り除いたそうで、大きいものの除去には2～3日かかってしまうほど大変だったそうです。現在この「ガラス玉」は松山工業の植え込みの一部に残されている。

立坑はそんなに深くはなく、作業場にも十分に自然光が差し込み明るかったが、常に水との闘いだったそうで、長い竹筒を工夫して使いポンプで汲みだしたそうだ。

切り出した石は、立坑から外へは二人がかりで担ぎ出し、そこから下の道路脇のトラック用のプラットホームまでは轎で下ろしたそうです。東京江東区までは烏山線の貨物列車を利用して出荷した。

最後に、中山石の用途をお聞きしたところ、旧中山国民学校、男子共同小便場の前板に中山石が使われ、ポロポロにへこんでいたと話されました。その他、竈、灰小屋、中山地区の石蔵などに使われていたとのことでした。

なお、最後に柏村氏から、月次石、高瀬石の採掘場について質問したところ、大山氏は聞いたことがないと話された。



ガラス玉と呼ばれた硬い塊



参考：灰小屋

5. 中山石の石蔵

大山賢一氏のインタビューを終え、再度中山地区を訪れた。目的は中山石で造られた建造物を探すことである。事前に柏村氏から情報を得ていたので容易に見つけることができた。

写真①は星宮神社の手前の石蔵。写真②の齋藤家の石蔵の大きさは4間×2.5間で、二階は座敷となっている。一階部分の外壁は整然としたツルメを生かし安定感を強調。二階部分はツルメを削り表面を平らに加工し、整層切り石としてバランスをとっている。入口は西側にあり深い瓦屋根の軒の奥にアーチ型の鉄の観音開きの金庫様式の扉となっていて、鍵がダイヤル式となっているのが珍しい。アーチ状の石積みの中央部分にはアカンサスをあしらった彫刻が施してあり、かなり凝った造りである。先代は建具店を営んでおり、第二次世界大戦後に造られたとのことであるが今後の詳しい調査が待たれる。東側の板倉は現在の母屋の新築により曳家され移動したもので基礎に中山石が使われている。



石蔵①



石蔵② 南面



石蔵② 西面入口



石蔵② 南西面



石蔵② 1階壁面



石蔵② 鉄製扉



地図：中山石採掘場跡と中山石の石蔵の位置
(付録2の地図で中山地区の位置をご参照ください)